

競争的研究資金の現状と課題に関するヒアリング 研究者の主なコメント

9月12日(木) 有識者懇談会

○相田卓三 理化学研究所創発物性科学研究センター副センター長
東京大学大学院工学系研究科教授

- ・ 研究実績を重視した書面審査を実施し、面接審査をやめるべきではないか。
- ・ 60ページもの報告書の記載を求められることがあるが、10ページ程度に簡素化すべきではないか。
- ・ 本当に評価すべきこととそうでないことをきちんと分けるべきである。
- ・ 学術研究は「発表した学術論文」により、応用研究は「それに集まった企業の事後活動」から評価すべきではないか。
- ・ JST が NEDO 化していると感じる。学術研究と応用研究を区別しないとあいまいな方向に寄ってしまう。このままでは NEDO の事業がキラークテクノロジーにならないだろう。
- ・ 若手向けの科研費(挑戦)は提案がよければ実績がなくても良いが、大きなグラントほど過去の実績を重視すべきである。
- ・ 若手とシニアは扱いが違ってしかるべき。Top1%論文はシニアがほとんどである。
- ・ 審査においては業績を問うというメッセージを出すべきではないか。
- ・ 科研費の特別推進研究や基盤研究(S)をもっと充実してほしい。
- ・ 日本の学術研究をV字回復したいというのが現場の意見。

○尾辻泰一 日本学術振興会学術システム研究センターPO
東北大学電気通信研究所教授

- ・ 科研費は研究者の自由な発想に基づくボトムアップの競争的資金。戦略目標など定めようのない新たな知の源泉の創出なくしてイノベーションの持続的創出はありえない。
- ・ 科研費の審査において研究業績欄を改めた。業績を見ないわけではない。業績に偏りすぎていた審査を研究遂行能力を見る目的としての業績に直した。
- ・ 科研費改革により、「大括り化」した審査区分の下、「総合審査」方式(書面審査の後に、同じ審査委員により合議審査)を実施。若手は実績よりも提案重視にした。
- ・ 大学の経営環境悪化により基盤的な研究費の肩代わり傾向が進行し、大型種目の振興が相対的に低下し続けている現状には大きな問題意識をもっている。
- ・ 科研費制度の一層の強化と基盤的経費等の支援、非競争的資金と競争的資金の両輪で、デュアルサポートを回復することが必要。
- ・ 限られた財源の中でいかに公平公正厳格に審査をし、学術の芽の出るものに配分できるかが重要。
- ・ 基盤研究種目群は回数制限なく何回でもとれる。ただし若手研究は年齢制限がある。
- ・ 審査における応募者の匿名化は今回の科研費の制度改革では大きな論点にならなかった。指摘を踏まえ、今後の検討課題とする。
- ・ 若手の確保及び評価疲れの解消のためには基盤的経費が必要。
- ・ 科学技術政策に対して、ステークホルダーである納税者、国民の理解を得られるようにしていく必要がある。